

衆生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2015 年 11 月 1 日 発行
(通巻 467 号)

現代座レポート No. 64

- ・『武蔵野の歌が聞こえる』の再演とお礼 (1)
- ・平右衛門ウォーク ・「今年も舞台に出たぞ」織壁哲夫 (2)
- ・「組合員自らの協同が原点」… 蔦谷栄一 (記事転載) (3)
- ・『遠い空の下のご郷』 地域コミュニティの劇場で (4)
- ・『遠い空の下のご郷』の紹介 (信州毎日新聞より転載) (5)
- ・NPO 現代座を支える人々 第 21 回 黒澤義之さん (6)
- ・昭和のコドモが伝えたいこと④木村快 ・活動日誌 (7)
- ・お知らせ (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者: 木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987

協同の歌声がひびく

『武蔵野の歌が聞こえる』再演

合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」は 9 月 4 日から 8 日まで、5 日間 8 ステージの公演を行いました。

今年もサポーターの皆さんが、ポスターを貼りチラシを配って宣伝し、お客様を集めてくださいました。新しい出会いが広がり、昨年に引き続き今年も見てくださいました方も多く、608 人の方が参加してくださいました。また 255 人の方が感想を書いてくださいました。



◆元禄大地震、宝永大地震、富士噴火と相次ぐ災害に農業は大打撃を受け、徳川幕府も倒壊の危機に直面する。呆然と富士の噴火を見つめる農民達。

お礼

昨年、千秋楽の幕が下りたとき、これで「芝居は心の街おこし」の旗印を掲げた 4 年間の終わりとほっとしたものでした。「ぜひ再演を」「もっと多くの人に見せたい」との声が多く、本当にありがたいと思いました。しかし、再演は無理だろうと思っていました。

ところが思いがけない反響がひろがっていました。それは芝居好きの人たちの声ではなく、芝居を見る習慣はないけれど、人間の生き方について問題意識を持った人々の間で、「まさか、劇場でこんな協同の歌声を聴けるとは思わなかった」という声が多かったことです。全く思いがけないことでした。

現在、農協問題が揺れていることもあり、JA 関係者たちの「もう一度、協同の原点に立ち返る時だと思った」という声が寄せられ、労働者協同組合ワーカーズ・コープの活動家たちからも再演されるのならぜひ協力したいとの申し入れがありました。ワーカーズ・コープとは労働者が自らの協同で農場や保育所など社会に必要な企業を設立する運動で、若い人たちの間で広がっている、世界的に広がる新しい波です。

また、昨年は遠慮して声をかけなかった平右衛門生誕の地、府中市の皆さんからも、多くの激励の声が寄せられました。

そうした声に励まされ、俳優やスタッフもボランティアでの再演を快く引き受けてくれ、新しい気持ちで台本研究を深め合い、今回はさらに確信を持って協同の歌声を響かせることが出来たと思います。

厳しい時代ですが、もうモノや金の乏しさに泣く時代ではなく、生活者同士の助け合いと自立した協同によって、強く心豊かに生きる時代だと思いました。

江戸史と本格的に向かい合ったのは初めてですが、歴史は現代の生活者が求める道を問い直す鏡だと改めて思いました。みなさん、本当にありがとうございました。生きている限りは協同の歌を歌い続けたいと思います。

木村 快

広がれ！協同の歌声

◆平右衛門ウォーク

9月27日(日)、川崎平右衛門の生まれた府中市の大国魂神社(おおくにたまじんじや)から、小金井市の小金井公園までを歩く「川崎平右衛門を歩こう！」が行われました。

この催しは、昨年「武蔵野の歌が聞こえる」を観てはじめて「川崎平右衛門」を知った「むさしの歩こう会」や「木谷ウォーキング協会」の方達がキャンペーンの実行委員会を準備されたものです。

『武蔵野の歌が聞こえる』の初日舞台を観劇された高野律夫府中市長をはじめ、約60人の参加者は大国魂神社を出発し、平右衛門ゆかりの場所をめぐりながら、小金井市に新しく出来た「平右衛門橋」を渡り、平右衛門供養塔が安置されている真蔵院まで、12キロの道のりを元気に楽しく歩きました。

『武蔵野の歌が聞こえる』出演者の黒澤



義之、東志野香、織壁哲雄も参加して、いっしょに歩き「完歩証」を府中市長からいただきました。



コースを歩き終わり、完歩証を持って。
黒澤義之、高野市長、東志野香
後・織壁哲夫

◆高野府中市長がホームページに書いて下さいました。

市長コラム43「協同の大地」

(前略)

去る7月下旬、都立小金井公園正面入口前の玉川上水に「平右衛門橋」が完成。先月は小金井市内の現代座会館で「武蔵野の歌が聞こえる」という合唱構成劇が再演されるとともに、大国魂神社から小金井公園までの「平右衛門ウォーク」も開催されました。

(中略)

平成29年、没後250年を迎える本市出身の偉人を各地の多くの方々がずっと大切にしていただいてることを改めて知り、とても嬉しく感じました。

江戸中期と現代では全てが大きく違いますが、人々の心は同じ。ますます進む少子高齢社会、危惧される大地震への対応には、協同・協働が不可欠なのです。(2015/10/11)

今年もまた舞台に出たぞ！

織壁 哲夫



プロジェクト・メンバーの織壁哲夫さん(左から2人目)と塚田善久さん(その右)が市民参加者として出演しました。

合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」にまた出たぞ！

今年の舞台はセリフが手直しされ、三人娘の語りに使う小道具も分かりやすくなった。そしてわれら市民参加2名の出演も多くなった。何よりもこれがヨカッタ。

(自画自賛、笑い！)

猛暑の八月後半から稽古が始まった。飢餓に苦しむ農民役の為、ダイエットを目指し、お腹をへこます訓練をしておいた。

通し稽古で出番をトッチテしまった。平右衛門さんが新田世話役になり村人たちを開墾に集めるシーンで出そこなったのだ。そのシーンをソデで見えて気が付いたのだ。

だ。やあやあ！と出ていったのだが、時遅しだった。

セリフがやっとついた。「家も作れるのですか」と驚き、気が乗らず「どうしたものかなあ」とそっぽを向き、うれしくなつて「本当ですか！」と叫ぶ三つだ。この短いセリフは意外と難しい。出番がふえ、演技も複雑になった。

井戸掘りの場面では鍬やザルを使い、ものを担ぐのだ。それも歌の合間だ。疲れた農民たちに「力のあるものは力、知恵のあるものは知恵、やさしいものはやさしさ」と平右衛門が呼びかける重なる場面だ。ここはノリが良いので楽しくできたね。立ち位置やキョロキョロする場面はやはりトチった。出番が多くなったので混乱して間違ふのだ。共演者からよく腕を引張られたものだ。

誰が来てるかが気になつて客席をついてしまう。あとでビデオをみると芝居をこわしていることが一目瞭然だ。

今年は昨年にもまして友人・知人が多くきた。二度目も多い。芝居後の一杯！も準備、居酒屋で楽しむのだ。元々、芝居とはそういうものだ。歌舞伎なんか食いながら、飲みながら観たものだ。

三日目あたりで疲労感が出た。去年はこんなことはなかった。出番もふえ、何よりも真剣にやるとつかれるものだ。

日本農業新聞

2015年(平成27年)9月11日(金曜日)

総合12版◎

万象点描



農的社会デザイン研究所代表 蔦谷 栄一氏

組合員自らの協同が原点

先日、東京都小金井市にある劇場・現代座で、合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」が再演され、川崎平右衛門の行動と協同を何よりも大事にする心に感激を新たにしました。木村快氏の脚本・演出で、話は武蔵野台地での新田開発を、多摩郡押立村(現在の東京都府中市押立)の名主であった川崎平右衛門が、農民の協同の力を引き出すことによって成し遂げたというものである。

1707年に宝永大地震が発生し、これに続いて富士山が大噴火した。飢饉(ききん)の続発と復興事業に伴う幕藩財政の悪化から、8代將軍・徳川吉宗によって享保の改革が開始された。この総責

■ 帰ってきた川崎平右衛門

任者を務めたのが大岡越前守忠相で、その目玉が武蔵野台地での新田開発であった。開発は遅々として進まなかったことから、「世襲の役人に代えて、現場で復興事業に取り組んでいる農民・町人の中から優れた人材を抜きて」として任命されたのが川崎平右衛門である。

平右衛門は新田開発を成功させるために、▽まとめ買いによって肥料を安価で調達して農家に貸し渡し、その収穫物を買収するための組合の創設▽幕府から無利息資金を引き出して商人らに貸し出し、その利息を使っている開発資金の獲得や備蓄を進める養いの料組合の設立▽畑を開きながら作物が取れないために逃げ出した農家が戻ってきた際の立ち帰り料の支給▽飢饉に

備えての俵蔵(ひえくら)の設置——など、さまざまな協同組合的な手法を駆使した。これらの手法は、現場を熟知した平右衛門ならではの知恵と工夫であるといえるが、そのベースに協同の心があつたからこそ発想され成功させることができた。これを劇場という空間が、全身全霊をもって受け止めるべく迫ってくる。

心打たれる場面はいくつもあつたが、平右衛門が新田世話人に任命されて初めて行った、不足する水を確保するための村民による井戸掘りの話とその一つ。井戸掘りに際して「皆の衆、これからは村で必要なことは江戸の商人に頼まないで、自分たちでやることにしよう」と、節約と自給を呼び掛ける。「いいか、力があるものは力を出せ。知恵がある者は知恵を出せ。心優しい者はみんなに優しくしてやれ」と諭すとともに、食べ物に事欠く村民に労働量に応じるだけでなく、老人や子どもにも一定量の麦を分配する。こうして井戸の掘削を実現させた平右衛門のやり方を見て大岡忠相は「なるほど、同じ百姓でも上から命じられたときの百姓と、おのれがやろうとするときの百姓では力の出し方は何倍も違ふのだな」と合点し、「新田開発の儀、平右衛門の心一杯に進めることを許す」と高らかに宣言する。

農協の自己改革が急がれる情勢にある。協同組合思想についてあらためて学ぶことも重要であるが、組合員や役職員の研修会などの機会を利用して本劇を鑑賞することをお勧めしたい。組合員自らによる協同が原点であることを納得し、たくさんの方のエネルギーをもらえること必至である。

◆筆者および日本農業新聞の了承を受けて、転載させていただきました。

『遠い空の下のご郷』ハンセン病療養所に生きて

地域「コミュニティ」の劇場で

『遠い空の下のご郷』は細々とはありますが、2005年1月から公演を始め、10年になりました。善光寺の仏教婦人会の公演は87回目でした。

一度に数百人の方に聞いていただくこともあれば、10人前後の小さな集まりで聞いていただくこともあります。また、中学生の皆さんにお話しする場合もあります。

私たちにとっては本当に大切な現代の劇場です。

9月11日（金）長野県仏教婦人会総会

長野市善光寺の大本願で行われた「第60回長野県仏教婦人会総会」の記念講演として呼んでいただきました。長野県内各地から集まった婦人会員は330人。会場の大広間だけでは入りきれず、地下ホールでプロジェクターに映る映像を見てくださる方もたくさんおられました。



昨年、佐久市で呼んでくださった佐久市仏教婦人会の岡村さんが推薦してくださって、この総会での上演が決まったのです。会場いっぱいの婦人達は本当にいっしょに心を動かしてくだ

さいました。笑い声も聞こえてきました。私が歌いながら涙で歌えなくなると、励ますように歌う声が客席から聞こえてきたのです。ありがたさで胸がいっぱいになりました。

感謝の気持ちで、あらためて善光寺本堂でお参りしました。

この日の演奏は松本真理子さんでした。

9月23日（水）伊那市高遠町 伊藤家の蔵

伊那市人権同和教育講演会（11月17日予定）では、地元のピアニスト伊藤ゆかりさんが演奏をしてくださるようになっていきます。

伊藤さんは高遠町に住んでおられ、ご主人といっしょに地域の音楽活動をやっておられます。お宅には古い蔵を改築した素敵な空間があります。ピアノがあつて照明もついています。音楽仲間のたまり場にもなっています。そこで、本番の前に地域の方をお呼びして語ってみようかということになりました。



この日は家族と地域のお友達に集まっていた、その輪の中で直接語りかける上演になり、この活動の原点を思い出させてくれました。上演に先立って、ハンセン病問題の現状についてお話しすることもできました。

10月21日（水）松本市島内町・町公民館

現代座の今村純二、俣子夫妻は16年前に自然の中で暮らしたいと東京から松本に移住しました。現代座の舞台がある時は車を運転して東京に通っています。



純二さんは今年、松本市島内町の「町区」という地域の公民館長に推され、色々な行事を担当してきました。せつかくの機会なので、地域の人達に現代座の活動の一端を知って貰おうと、この公演を企画しました。俣子さんと二人でチラシを作りチケットを配って大忙しです。公民館には専用の駐車場がないため、近くのお宅の駐車場や空き地をお借りして、地域の方が駐車場の案内や受付の係りをやってくださいました。昼は57人、夜は41人の方が集まってくださいました。

開演に先立ち、「公民館長の今村です。この挨拶が済めば、一步舞台上がってアコーディオン弾く出演者になります」と言うとき皆さん大爆笑です。もう始まる前から楽しんでいました。

語りが始まると泣いたり頷いたり。地域の劇場は演劇の原点です。



信濃毎日新聞 2015年10月17日(15面くらし欄) 掲載記事

ハンセン病患者の体験 語りと音楽

差別の歴史 訴え続ける

国の政策で強制隔離されたハンセン病患者の体験を語りで訴えるNPO現代座(東京)の「遠い空の下」の故郷ハンセン療養所に生きて」が21日から、県内3カ所で上演される。語りを務める木下美智子(長野市出身)は、過酷な境遇を生き抜いた人々に思いをはせ、「人間の強さと優しさを感じて、温かい気持ちになってほしい」と話している。

21日に松本市、22日に安曇野市、11月17日に伊那市で上演。国立ハンセン療養所に暮らす70代と90代の女性2人がたどった歩みと故郷への思いを音楽と合わせて伝える。一人芝居のように表現し、「つらすぎる話ではなく、母親や夫への愛をこく普通の女性が明るく語っている」と言う。

「遠い空」は2004年から全国約90カ所で上演。現代座

NPO現代座 長野市出身の木下美智子ら

松本・安曇野・伊那

21日から上演



「気楽に足を運んでほしい」と話す木下美智子(長野市)

代表の劇作家、木村快が01年に九州にある2カ所の療養所を訪ね、元患者たちから聞いた体験が基になっている。木下は木村の助手として証言を聞き、交流を重ねてきた。

木下は北佐久郡軽井沢町に生まれ、飯田市と長野市で育った。長野西高、県短大(ともに長野市)では演劇サークルに所属し、1972(昭和47)年、劇団統一劇場(現・現代座)に入団し

た。

ハンセン病をめぐるのは、入所者の権利擁護などが盛り込まれたハンセン病問題基本法が08年に成立したことを受け、既に「解決した問題」と受け止められるようになったという。だが、故郷に戻れない入所者は少なくなく、高齢化が進んで亡くなる人も増えていると木下。「誰もが、誰かを差別してしまう可能性はある。隔離したことを絶対に忘れてはいけない」。生きている限り、訴え続ける覚悟を示した。

会場は、21日が松本市の島内・町公民館、22日が安曇野市豊科交流学習センター。ともに1日2回公演で、開演時間は午後2時と午後6時半。入場料は一般千円(当日200円増し)、高校生以下500円。11月17日の伊那公演は午後1時半から市生涯学習センターで入場無料。問い合わせは21、22日の公演が今村さん(☎090・7246・2004)、11月は伊那市教育委員会(☎0265・78・4111)へ。

10月22日(木) 安曇野市

豊科交流学習センター「きぼう」



豊科(とよしな)交流学習センターは合併して生まれた安曇野市の新しい市庁舎の隣にあります。1階が図書館、2階に映画監督「熊井啓記念館」と学習室、多目的ホールがある真新しい建物です。

主催は「ここをつなぐ劇場をつくる会」で、「特定非営利活動法人 コミュニティーケアサポート」代表理事の伊東勉さんが企画して動いてくださいました。今村徹子さんがこのNPOで

介護の仕事をするようになったのがきっかけでした。伊東さんはこの公演は第一歩ですと、色々なところに声をかけてくださいました。そして開演前には「このハンセン病のことを心の深いところで受け止めてほしい」と話してくださいました。

松本市や塩尻市、長野市からも来てくださって、昼は62人、夜は38人の方が見てくださいました。照明設備のあるホールなので、東京からスタッフの木村康恵さんが駆けつけてくれ、島内と安曇野の公演を支えてくれました。

島内、豊科の2カ所の公演は「長野県人権尊重社会づくり県民支援事業」として県の助成をいただいて実現しました。

NPO現代座を支える人々

第二十一回

黒澤義之さん

記 武本英之



くろさわ・よしゆき
東京芸術座を経て、1979年、
劇団「青芸」の設立に参画。
2003年よりフリー。
2011年よりNPO現代座正
会員。現在は監事。

◆平右衛門の人間像を探る

心の街おこしドラマ『武蔵野の歌が聞こえる』の主人公・川崎平右衛門役を演じた役者が黒澤義之さんだ。昨年に続いて今年9月の再演も大好評だった。現代座がある小金井市の市民の間から立ち上がった芝居だけに、市民からは大なる期待と同時に少しの嘘も見逃さないぞといった鋭い批判の眼差しもあろう中、堂々たる「黒澤平右衛門」を演じきったようである。

どう役作りをされたのか。「文献上は、平右衛門は武蔵野新田開発を成功させ、美濃の国で長良川流域の治水を成し遂げ、石見銀山を改革したと事跡ははっきりしているのですが、人となりが全く分かりづらい。平右衛門という人間を、どう理解したらいいのか」と黒澤さんは悩んだ。その時、ヒントになったのが平右衛門が重視していた儒学の五常「仁・義・礼・智・信」。

お芝居では、平右衛門が村民に井戸掘りの仕事を仕分ける際、五常を五つの札に分け、「赤ん坊を預かったお婆さんは『智』の札だから麦一升、赤ん坊は『信』だけ

ら麦5合」と、全ての人間に報酬が行き渡ることを示し、やる気を喚起させる箇所が出てくる。「苦しい時ほど人を思いやり、欲に囚われることなく、成すべき事をなす……。この五常の精神を平右衛門は人生に立ち向かう時の指針にしていたんだと」。こう感じた時、黒澤さんの中で平右衛門像がくつきりと見えてきたという。

◆思いがけない再会

筆者にとって黒澤さんは由縁のある役者さんでもある。現代座での筆者の2作目の芝居『ここは幸せ0番地』（2011年上演）に黒澤さんが出演してくださっているのだ。主役のタクシードライバー・ガンさんの同僚・戸隠役。主人公ガンさん役は熊倉正博さん。頑固一徹のガンさんに対し、「絶えずいさめて対面の張れる役者が必要だな」と当時脚本を指南していた木村快さん。その要請に応え、現代座の寺崎昌広さんが連れてきたのが黒澤さんだった。この芝居は黒澤さんにとって現代座に出演した最初の芝居となった。

「木村快さんの仕事については統一劇場時代から関心を持っていたけれど、まさか自分が参加することになろうとは思っていませんでした。全く思いがけない再会でした」。

これ以降、『ユーモレスク・よみがえる夢』の靴職人、『約束の水』の林業作業士、『出会いの街』の建具屋など、専門の職人といった役どころを多くこなす。黒澤さんは「怖い、取つきにくいと、一見思われがちですが、人とのコミュニケーションが下手なんです。自分の気持ちにだけは嘘をつかないようにしています」。

◆共感を生み出す劇場の魅力

黒澤さんと木村快さんとの出会いは1980年代初めにさかのぼる。黒澤さんと寺崎さんは1979年に「青芸」という劇団を立ち上げたが、当時、快さんに作ってもらった作品が京浜工業地帯の人間模様を描いた合唱構成劇『ターミナル』（1981年）という作品。黒澤さんのその時の役がタクシードライバーだったというから、いよいよご縁を感じないわけにはいかない。

「大所高所からものを言う演出家ではなく、自由にやらせるタイプでした」が黒澤さんの快さんの最初の印象。以来、NPO現代座の正会員に至る今日まで、木村快の芝居に関わってきた。「最近ようやく、快さんの『劇場論』なるもののイメージが私の中で固まりつつあります。いろんな人とのつながりの中で芝居を創っていく。集まった人たちが劇場の中で共感し合う。この先に現代座の未来が見えてくるのか、そこはみんなと意見交換が必要です」と黒澤さん。

黒澤さんのもう一つの隠れた顔が、劇場の音響マン。「昔の新劇の劇団では、若手の俳優はみんな大道具製作、照明、音響の仕事を専門的に叩き込まれましたからね。それがバイトの手段にもなりました」。

國學院大學で日本史を専攻していた3年の頃、職業に先生を選ばず演劇の道を選んだ。今年で六十八歳。老化防止のため、多い時で1日2万歩を歩く。「気力の衰えを感じてはやつていけないですからね」。求道の役者は往く。（了）



※このシリーズを担当している筆者の武本英之さんは専門紙「東京交通新聞」の編集局長。NPO現代座正会員でもあります。

昭和のコドモが伝えたいこと④

日本人の選挙を考える

木村 快

10月11日(日)と12日(祝)、現代座3階小ホールで木村快の話と戦時中の「紙芝居」の上演をしました。これは戦後70年の今年、戦争の時代をもう一度見直してみようということで、4月の試演会から続けてきたものです。

◆総選挙 一億国民の選択はなぜ戦争に向かったのか

今回の紙芝居『明朗一票』は昭和17年、第21回総選挙の直後、大政翼賛会宣伝部が翼賛地方議会選挙に向けて制作した作品です。内容は「情実や賄賂」に取り込まれず、村の命を守り通した二宮尊徳のような立派な人を選びましょうと呼びかける、現代でもそのまま通用する話です。それなのになぜ、当時の国民は戦争に向かって突っ走ろうとする議員たちを選んだのでしょうか。ここに何か大きな問題があるように思います。



昭和17年発行の『明朗一票』上演者・長谷川葉月



第21回総選挙は「翼賛選挙」と呼ばれ、軍部を押さえることができなかった近衛内閣が総辞職し、代わった東条

英機内閣が対米戦争を開始し、貴族院・衆議院の院内会派「翼賛協議会」を結成して衆議院の80%の議席を占め、独裁国家となった選挙です。そして負け戦を繰り返しながら破滅に向かって走り続けました。

普通選挙は昭和3年から昭和17年まで、6回行われています。父や兄を戦場に連れて行かれながら、選挙のたびに戦争に向かって突っ走ったのが民意であったとするなら、いったい日本人の選挙って何だろうということになります。

◆「一億」という危険なタテマエ

ここで突然、「一億総活躍」という言葉が躍り始めました。国民をひくくるめて「一億」と呼んだ悪夢がよみがえります。ぼくら昭和のコドモは物心つく頃から「一億総動員」、「進め一億火の玉だ!」、「一億決戦」、「一億玉砕」をタテマエとした教育を受けてきました。そしてついに「一億総懺悔」となりました。

日本人はタテマエと本音を使い分ける文化の二重性を持つっており、本音は「いや」でも、タテマエとして周囲の多数派の雰囲気と同調する特徴があります。戦争というタテマエに屈服したのです。

昭和のコドモのぼくは、少数派でいいから「顔の見える」仲間と共に行動し、本音で語り合いながら、少数派のタテマエを掲げたいと思います。まずは自分たちの命を守ることからです。そして助け合おうのです。

★11月29日に木村快を囲んでゆつくり語り合う会を開きます。ご希望の方はどうぞ。

現代座会館 8月〜10月 活動日誌

- 8月4日 「平右衛門プロジェクト」会議
- 9日 「現代座レポート63号」送付作業
- 17日 「武蔵野の歌が聞こえる」サポーター会議
- 20日 「緑町ふれあいサロン」
- 28日 「武蔵野の歌が聞こえる」サポーター会議
- 9月17日 「緑町ふれあいサロン」
- 17日 「武蔵野の歌が聞こえる」サポーター会議
- 27日 平右衛門ウォーク
- 29日 ワーカーズコープ相良氏来訪
- 10月16日 「緑町ふれあいサロン」
- 26日 1階トイレ改修工事
- 27日 ワーカーズコープ相良氏来訪

【現代座ホール】

- 8月3日〜19日 劇団「燐光群」稽古
- 8月20日〜9月3日 「武蔵野の歌が聞こえる」稽古
- 9月4日〜8日 「武蔵野の歌が聞こえる」公演
- 9月10日〜12日 劇団「シアター青芸」稽古
- 10月11日〜20日 八峯企画「しあわせのタネ」稽古

【三階小ホール】

- 8月1・2日 「昭和のコドモが伝えたいこと」第2回
- 8月18日〜 劇団「希望舞台」稽古(8日間)
- 9月8日〜 劇団「海流座」稽古(7日間)
- 9月30日 朗読教室・体験講座
- 10月11・12日 「昭和のコドモが伝えたいこと」第3回
- 10月14日 朗読教室開講
- 10月18日 津田「リトル・コンサート」
- 10月28日 朗読教室
- 8月〜10月 りんどうの会 稽古

【定期使用 二階サロン】

- 毎日曜日 早稲田ラジオスクール(学生支援)
- 毎月曜日 子どもクラブ・パンピーノ
- 毎水曜日 熟年パソコンサークル
- 隔木曜日 〆〆〆熟年講座
- 毎火曜日 東志野香の三カ教室(3F)

誰でもできる朗読教室・始めました

「武蔵野の歌が聞こえる」に出演した俳優、長谷川葉月さんを講師に、初心者向けの朗読教室が始まりました。10月から来年3月までの6ヶ月間、月2回の講座です。

10月14日(水)がスタートでした。呼吸法と発声から始めて、口をきれいに動かすための基礎訓練を丁寧に行います。それからテキストをみんなで少しずつ読んでいきます。

第1回のテキストは芥川龍之介の「杜子春」でした。受講生は9人。男性3人、女性6人で年齢も参加した動機も様々です。はじめて出会った人が多いのですが、いっしょに体を動かしたり、大きな声を出したりしていると、自然に打ち解けてきます。和気あいあいとした雰囲気、長谷川先生の指摘にうなずいたり、質問したり、みんな積極的です。



いくつかのテキストをみんなで読んで勉強したあと、来年からは各自が自分が発表する作品を選んで稽古し、3月23日には現代座の3階小ホールで発表会をするようになっていきます。

NPO現代座のお知らせ

TEL 042-381-5165 FAX 042-381-6987

伊那市人権同和教育講演会

「遠い空の下のご郷」

～ハンセン病療養所に生きて～

日時：11月17日(火) 13:30

会場：長野県伊那市生涯学習センター (いなっせ6階)

入場無料・どなたでも参加できます

「昭和のコドモが伝えたいこと」

これまで4回の紙芝居・講演について
木村快を囲んで自由に語り合う場です。

11月29日(日) 14:00～16:15

参加費：500円 現代座3F小ホール



11月14日(土) 19:00

11月15日(日) 14:00

11月16日(月) 18:30

会場：墨田区曳舟文化センター

入場料：700円

東京都・墨田区民劇場『出航』を再演
東京都の墨田区民劇場が創立60周年記念公演として木村快作『出航』を上演します。墨田区民劇場は7年前にも『出航』を上演していますが、再び上演することになりました。
『出航』は1981年に統一劇場によって初演された作品です。高度経済成長から取り残された漁師たちが、いったんは漁をあきらめますが、やはり海で育った仲間が離ればなれになつては生きていけないことに気づき、再び荒海に出航していく話です。

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費(現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円

協賛会員 10,000円(1口以上)

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座